

22 壁には字を練習して傍らに訂正を加えたものが今も残っている。(それらを見ると、もうほとんど絶え難い悲しみに襲われる。)

23 あの子の言笑する様子は今もありありと目に浮かぶけれど、

24 その立ち居振る舞いを見ようと思うと、(あの子はもういないのだと気づいて) 呆然とする。

25 阿満の亡魂は今ごろ、須弥山のほとりの無数の道に心細く迷っているのではないか。

26 そして無明の輪廻を脱しえず、父の知らない三千世界のどこかでまた生まれ変わるのだろうか。

27 南無観世音大菩薩、

28 どうぞ吾児を守護して、極楽浄土の大きな蓮の上に座らせてやってください。

* 小島憲之・山本登朗『菅原道真』(日本漢詩人選集 一九九八年)

* 傍線筆者訂正・加筆箇所

道真の愛息を失った父親としての悲愴感・喪失感が道真自身の絶叫とも換言できるような語で畳み込まれており、読み手にそれが深く迫ってくる。

しかしながら、「503秋夜」と比すと、明らかに、道真自身の詩情が異なる。詩という媒体に託す道真の精神の昂揚度合が大きく異なるのである。この「117夢阿満」を詠む道真には子を失う喪失感とともに、亡き子の冥福を切に祈る親としての強い使命感、(それはとりもなおさず生命力に他ならないが)それが横溢していることを認めることは容易である。そこに「503秋夜」との大きな差異を感じる。

そしてこの詩を通して「503秋夜」の方に却って一層の子を亡くした苦悩と喪失感が浮かび上がってくるように